



公明党会派議員研修報告書

第85回全国都市問題会議

～文化芸術・スポーツが生み出す都市の魅力と発展～

- 日程 令和5年10月12日(木)～13日(金)
10月12日 9:30～16:30
10月13日 9:30～11:50

- 場所 八戸市公会堂・公会堂文化ホール

- 参加者 鬼頭博和 谷平敬子

10月12日(木) {9:50～16:30}

基調講演「アート役割って何だろう？」(概要)

東京藝術大学長 アーティスト 日比野克彦

アートとは一体何でしょうか？ アートが人に及ぼす機能、可能性をあらためて考えてみて、現代社会の中で人に対するアートの働きを3つのとらえ方で分析しています。

一つ目の捉え方は、アートとは「生きる力」である。

アートに欠かせないのがイメージする力、想像力です。想像する力には、細かな規則正しい時間の目盛りをにじませて、前にも後ろにも動かしてくれる力があります。想像力を備えているアートには、時間に制御されてしまっている私たちの身体の中の時間を柔軟に伸ばしたり、縮めたりすることができる機能がある。アートは、人が人らしく生きていくためにも重要な役割を持っている。

二つ目の捉え方は、アートとは「多様性のある社会を築く基盤」である。

現代社会において、多様性の価値観への眼差しが次世代の大きなテーマとなっている。障害のあるなしとか、また、個々の異なる背景に関わらず、誰もが互いにその人のそれぞれのらしさを排除しない社会を目指している。

他者との違いが、その人の個性になるというアートの価値観は、多様な価値観の存在を認識できるフィールドになるような気がする。いくら人々を細かく分類したとしても、似ている人と似ている人の中には似ているけれども少し違っていると言う人がいて、その差異には線を引くことができません。その間には果てしなくグラデーションが広がっている。アートは「多様性ある社会を築く基盤」になると捉えることができるのではないのでしょうか。

三つ目の捉え方は、アートは「社会的な課題に対して持続的に取り組み続けていくには大切なも

のである」ということである。

人の心を動かすことは、アートの特徴、役割、特性ともいえる。様々な社会的課題は項目別に単独で別々の原因だけで起こっていることではなく、共通しているものがある。それは人々の日々の行いであり、その共通の原因は、人の行動に起因しているということである。ならば、その人の行動を変容させていくには、その一人ひとりの気持ちの変化が、心の動きが必要になってくる。そしてその心に作用するところにアートが機能してくる場面がある。

大きな力が世界を動かすのではなく、一人ひとりの小さいけれども、確実にある、少しずつ異なった多様な思いが時代を変化させていく。

具体例として、熊本市現代美術館の館長が、市役所各課からの相談を受けている。名付けて「ご用聞き」を実施している。館長の話聞いて前向きになれる職員が増えているとのことでした。まさに「アートは人の心を動かすもの」である。

主報告 「八戸の文化・スポーツによるまちづくり」

青森県八戸市長 熊谷 雄一

・文化によるまちづくり

八戸では古くから市民による文化活動が様々な分野（「法霊神楽」などの伝統芸能、文芸、美術、華道、茶道、生活文化等）、幅広い年代で活発に行われてきた。2006年、市では、こうした活発に行われている文化活動を「多文化」と定義し市民や有識者による「多文化都市八戸推進会議」を立ち上げ、その過程で、文化政策の新たな展開として地域資源の再評価や地域課題にアートの力を活用してアートプロジェクトの必要性などがビジョンとして示された。

そのような中、2011年に「八戸ポータルミュージアム はっち」が、地域資源の魅力を創出・発信し、文化芸術、産業、観光、市民活動、子育て支援といった各施策を一体にした施設としてオープンした。様々な機能を一体化したこのような施設は大変珍しく、市民が観客としてではなく、当事者として、自ら参加したり創作したりできる形をつくるのが、はっちの運営コンセプトである。

・スポーツによるまちづくり

八戸では、冬期は雪が少なく寒冷で空気が乾燥しているため、古くからスケートが盛んであった。スケートは八戸の風土が育んだ文化といえる。2019年には、「八戸市長根屋内スケート場 YS アリーナ八戸」がオープンし国内外の大会が開催されスケート新時代を迎えた。現在は、競技団体と連携を図り、子どもたちのスケール教室の派遣指導などを通し競技人口のすそ野を広げることに継続して取り組んでいる。また、サッカー、アイスホッケー、バスケットボール Bリーグ、3人制バスケットボールの4種類のプロスポーツチームが活動拠点を置き、ホームゲームの開催だけでなく、子どもたちや指導者の育成プログラムの実施など、市民による多様な関わり、楽しみや活躍、学びの場を提供している。

・今後の展望は開かれたパブリックな場をつくること

八戸美術館の特徴的な構造としてジャイアントルームがある。美術作品の展示は、通常、専門諸室で行われるが、隣接するジャイアントルームは、それらの展示企画と連動した市民参加型のさまざまな活動を行うことができ、同時に美術とは異なるジャンルのモノやコトを受容し、出会う場

所として、あるいは美術に特化しないあいまいな場所、居心地の良い場所として機能している。

効率や成長を重視することから、成熟社会への価値観の転換を前提としたまちづくりのあり方の一つとして、互いの顔や活動が見える空間作りによりコミュニティ感覚を醸成し、そこで誘発される交流からより良い社会を作るイノベーションが生まれるきっかけになれば良いと考えている。多くの価値が集積してこそ人は歩きたくなる。文化とスポーツは元来、内に閉じこもるものではなく、他者と交わり外へと開いていく性質を持つのであり、そのようなまちづくりにぴったりである。

一般報告

「まちづくりの活力は地域に根差した文化政策から育まれる」

文化事業ディレクター 演出家 吉川 由美

八戸市は中心街再生の起爆剤とすべく、「八戸ポータルミュージアム はっち」を2011年に開館させた。街を再生する市民力をブーストするには、市民が自分事として参加できる、分野を横断し壁を揺さぶるようなアートプロジェクトが必要である。そのために、地域に根差したテーマを探し、アーティスト、市職員、コーディネーターたちとプロジェクトを進めた。「八戸のうわさ」「八戸レビュー」「はっち流騎馬打球」といったイベントを立ち上げ、商店街の方々、世代を超えた多様な市民がはっちに集まってフラットなコミュニケーションの場が実現された。

アートプロジェクトの現場では、異なる立場の人たちの間にある壁が壊れ、対等に語り合い異なる価値観を容易に認め合える場が生まれる。まちづくりにはこのようなプラットフォームがなければならない。

八戸市では八戸三社大祭が真夏の四日間にわたり開催される。毎年27の山車組が新たなテーマで巨大な山車を作る。仕事が終わると、各山車小屋に老若男女が集い、夜半まで山車作りに専念する。祭りは地域経済を浮揚しうる観光産業の優良コンテンツでもある。その商品としての祭りを支えているのは、多くの場合、市民のボランティアな力だと言うことを決して忘れてはならない。人々が疲弊することなく、祭りや芸能に参加する喜びと意義を感じ続けることが、その継承につながる。支えている市民力の価値を可視化し讃える機会が、どの地域でもほとんどない。「地域の分母としての文化」の価値を、今、行政も市民も意識するべきである。

観光産業や関係人口獲得にとって、「地域固有の文化」はキラーコンテンツである。それは経済活動をブーストするパワーを持っており、一方で、「地域の分母としての文化」は、災害等の危機から再生する力やインクルーシブな思想を住民の中に育み、自身を肯定しながら安心して生きられる社会の礎を創る。祭りの例のように、経済のうねりが地域文化を疲弊させてしまう危険を見極めつつ、まちのソフトパワーと地域社会の分母を担う人づくりを意識し、地域に根ざした文化政策のあり方を考えたい。

「標高差1500mの地勢を活かしたスポーツ・ツーリズムの創出」

長野県東御市長 花岡 利夫

長野県東御市は長野県の東部に位置し総面積 112.37 km²で、人口約3万人の小さな市であ

る。江戸時代には北國街道の宿場町「田中宿」と「海野宿」を中心に発展し、海野宿は伝統的な家並みが現在まで保存されており、「重要伝統的建造物保存地区」に選定され、観光の要所となっている。上信越高原国立公園の湯の丸高原は、高山植物の宝庫で、花高原として親しまれている。しかし、時代の変遷とともに観光スタイルが多様化し、来訪者も減少している。そこで、持続可能な誘客型の基盤づくりを進めることが必要となった。

東御市は中央に千曲川が流れ、浅間山系にかけては標高差が1500mにも及ぶ扇状地が広がり、左岸には標高600～850mの2つの台地、川に沿って河岸段丘があり、平地が少ないことがまちの欠点であった。この欠点を地域の資源につなげるため、ワイン醸造を思いついた。標高差のあるまちの特徴を活かし県内初となるワイン特区認定を取得し、現在では14件のワイナリーがワイン醸造を行っている。

もう一つ標高差を活かせるものが「高地トレーニング」であった。国内には高地トレーニングができる地域が少ないため、日本水泳連盟が視察に訪れ、湯の丸高原の1750mという標高に興味を持ったことから、高地トレーニング用の屋内プールとそれに付随した施設の建設が決まったのである。2019年10月に高地トレーニングができる国内唯一の屋内プール「GMO アスリーツパーク湯の丸屋内プール」が完成した。東京2020オリンピックでは、この施設を利用して練習を行った大橋悠依選手が金メダルを獲得したことで、競泳ニッポンの強化拠点となった。

地域の欠点をそのまま欠点としてとらえず、個性として認識し資源として活用したことで、今では水泳関係者の中で知らない人はいない。まさに弱みを強みに転換した一例である。

「まちづくりにおけるプロスポーツクラブの有効活用」

(株)鹿島アントラーズ FC 取締役副社長 鈴木 秀樹

プロスポーツクラブには、地元自治体、企業と連携しながら、まちづくりを推進していくポテンシャルがある。鹿島アントラーズは発足30年の歩みから、まちづくりに関わることこそ地域に存在する意義であるという思想に至っている。

・鹿島アントラーズと地域との深いつながり

アントラーズの現在のホームタウンは、鹿嶋市、潮来市、神栖市、行方市、鉾田市、茨城県の鹿行市の5市で、クラブ創設時からホームタウンの自治体が出資団体として参画しているのが特徴である。また、5市の行政職員が一人ずつ1年交代でクラブに出向し、民間企業の経営感覚、意思決定のスピード、幅広い視野、斬新な発想等を身につけ、各自治体にもどり自治体の活性化に役立っている。

鹿嶋市では、総合計画の中にアントラーズとともにまちづくりを進めると明示されており、コロナ禍でクラブ経営に大きな打撃を受けた際には、ふるさと納税型のクラウドファンディングを実施し2020年～22年の3年間で合計4億円を超える寄付が集まった。クラブが単なる民間企業ではなく公共性の高い存在であり、地域に役立つ「資源」であると認められているからである。

・鹿島アントラーズによる地域の社会課題解決

アントラーズが本拠地を置く地域は、高度な医療、教育機関に乏しいため、「アントラーズスポーツクリニック」を設立し、整形外科医療、リハビリの高度なノウハウを地域に還元している。ま

た、地域の教育事業にも力を入れている。パートナー企業の協力を得て、プログラミング教室や食育活動を実施している。さらには、鹿嶋市の全小学校の児童がアントラズの選手が登場する英語教材を使って学んでいる。その他にも、行方市では空調大手の高砂熱学工業と包括連携協定を結びエネルギーの地産地消に向けた取り組みを、2022年にはサントリーホールディングスとホームタウン5市で、使用済みペットボトルのリサイクル事業もスタートしている。プロスポーツクラブは多種多様な企業、人材と繋がっている。クラブがハブとなり、様々な社会課題の解決が可能となる。

・プロスポーツクラブを有効に使い切る

自治体から見ると、地域のスポーツクラブには、まちづくりにつながる様々な使い道がある。例えば、現在では、どんな小さなクラブでもデジタル技術を駆使した分析や顧客関係管理を進めている。自治体は、地元クラブが集積しているデータを有効に活用すべきであり、より多様なデータ収集をクラブの力を借りて進めるべきである。

地域の貴重な資源であるプロスポーツクラブを有効活用すれば、自治体だけでできないことが可能となる。社会課題を解決し、よりよいまちづくりを推進することができる。

10月13日(金) {9:30~11:50}

パネルディスカッション

「テーマ」一巡した文化芸術を活用したまちづくり～自治体文化行政から魅力的なまちへ

「コーディネーター」東京大学大学院人文社会系研究科教授 小林 真理

東京大学大学院人文社会系研究科教授の小林真理氏は、最初に「人間がいるところには、必ず文化がある。」と述べ、日本全国に多様な文化資源があり、その文化を享受し創造していくのは市民であると語る。地域から文化を発信し、地域に「推し」を見つけてライフスタイルを充実させる人たちが増えている。それは特に、文化やスポーツの領域にみられる現象である。文化、文化施設が、まちづくりのコアとして展開されてきている。

「パネリスト」

合同会社 **imajimu** 代表取締役 今川 和佳子

「八戸の独自性が生み出してきたもの」

「八戸の独自性が生み出してきたもの」をテーマに複合施設「はっち」の特徴と取り組みについて報告した。2011年に「はっち」という施設がオープン。複合的な機能を持つため、地域住民の理解をえるには、開館までの数年間スタッフ総出で説明に回るなど多くの苦労があったが、オープンしてからは多くの老若男女またアーティストが、積極的に利用してそれぞれに楽しんでもらえる場所として機能している。開館から1周年には、来館者が、88万8,888人を達成した。この施設ができたことで、中心街の通行量も前年に比べ30%増、空き店舗に32事業所が開設するなど、まちへの波及効果をもたらした。「はっち」は、美術や現代アートの専門施設ではないが、まちをフィールドにさまざまなプロジェクトに通じ組んできた。「酔っ払いに愛を～横丁オンリーワンシアター」「デコトラヨイサー」など、アーティストと市民、そして八戸ならではの文化をテーマにそれ

それを掛け合わせることで、無数の発見と人のつながり生まれていることを報告した。

拓殖大学商学部教授 松橋 崇史

「地域活性化におけるスポーツの役割とその変化」

1993年に開幕したJリーグは、誕生当初より「地域密着」を掲げ出発した。その後、親会社の業績の悪化などから親会社に依存しない、地域密着の経営戦略がさらに浸透していった。地域活性化の機運の高まりやJリーグの誕生によって、スポーツと地域社会の距離が縮まった。スポーツで競い合うとは、対戦相手に勝利するために「全力」で取り組むプロセスを含み、そのことが参加者や観戦者に活気をあたえる。そして、スポーツが、パラスポーツや、ゆるスポーツ、eスポーツなどを含みながら、多様な人々が同時に取り組めるように変化し拡張している。スポーツに新たな価値を付与することで、スポーツを地域活性化に生かしていく視点が重要になると語った。

静岡県沼津市長 頼重 秀一

「スポーツとアニメを活用したにぎわいの創出～誇り高い沼津を目指して～」

沼津市は、スポーツを活かしたまちづくりに力をいれている。(1)フェンシングのまち沼津 平成31年(2019年)に日本フェンシング協会と協定を結び、「フェンシングのまちづくり」をスタートした。現在、拠点施設である「F3BASE」を中心に、官民一体で「フェンシングのまち沼津」というオンリーワンブランドを目指している。(2)アスルクラロ沼津 J3リーグクラブである。沼津をホームタウンとして、サッカー教室をはじめ、防災、健康づくり、物産PRなど、さまざまな事業を展開している。また、アニメ「ラブライブ！サンシャイン！！」を活かしたまちづくりを展開している。市民1人1人がまちに誇りを持ち、いつまでも輝き続けるまちとして、次の100年にむけて新たな一歩を踏み出している。

京都府綾部市長 山崎 善也

「文化芸術・スポーツで紡ぐまち・綾部 ー市民一人1文化・1スポーツの推進ー」

綾部市は、多くの市民が文化芸術に触れ親しむ機会の充実を図り、「市民一人1文化」の推進により文化のかおるまちづくりを目指している。特に、1980年度から開催されている「綾部市民合唱隊」は、毎年12月に開催され、今では市を代表する文化イベントの1つとして初冬の風物詩になっている。スポーツの分野では、「市民一人1スポーツ」の実現を目指して、自治体等対抗ソフトボール大会や市民駅伝競争大会など地域に根差したスポーツ大会のほか、あやべ里山サイクリング、カヌー、トレッキングなど、豊かな自然を活用したスポーツ観光の推進とともにスポーツによるまちづくりに努めている。文化芸術やスポーツをまちづくりに活かすことが、ふるさと教育に貢献し、地域アイデンティティーの確立が図られると語った。

「所感」

文化芸術やスポーツが、地域活性化に大きく貢献している事例を学ぶことができ、大変参考になった。2011年に、地域資源の魅力を創出・発信し、文化芸術、産業、観光、市民活動、子育て支援といった各施策を一体にした施設としてオープンした「八戸ポータルミュージアム はっち」は、市民が観客としてではなく、当事者として、自ら参加したり創作したりできる施設で、八戸を象徴しているものとなっていた。岩倉市には、山車という貴重な文化遺産があるので、うまく活用することで、まちづくりを活性化できるのではないかと感じた。まちづくりの課題として勉強していきたい。

その他にも、素敵な文化、歴史があり、素敵な市民の方が大勢おられる。それをどのように融合していくか考えて行きたい。また、地域の活性化にスポーツの可能性を見ることができたので、本市においても、スポーツの普及に向けた取組を提案していきたい。